

IV-185 地場産業を生かしたまちの個性に関する研究

—— 藤岡市を事例として ——

群馬県庁 正会員 松岡 利一
 群馬大学 “ 中村 良夫
 群馬大学 “ 斎藤 潮

—— 研究の背景 ——

多くの都市で個々の文化を形成するにあたり、街の個性という形でその土地らしさを都市空間に表現している。しかし実際はものまね的なものであったり、地域との整合性に欠けるものであったりする例もある。

その中において、街の姿、個性としてその土地でなければ成立し得なかったものを求め、さらにその成長の過程が住民の間に支援され、やがては住民の力によって進められる可能性を有していると考えられる例もある。

街の個性の創造は地方文化の創造という点から、街づくりに積極的に参加するという“はたらき”の中で、住民みずがらが主体となって進められるような形をとるべきであると考えるのである。

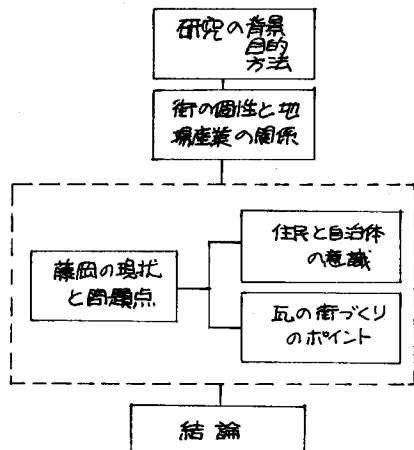


図1 研究のフロー

—— 地場産品の活用 ——

ここでは、街の個性を構成する要素のうちの文化的人工物において地縁的つながりを求める例として、その土地で生産される素材を都市空間で積極的に使用することをとり上げて研究をすすめる。

都市の景観面での個性を、その空間を構成する構造物の外構部素材において地域とのつながりを保つ、それは地場産業として素材産業を有しているという、地理的、歴史的、風土的な利点をうまく生かすという事になる。

したがって現在、時代の要求の中で、従来の経済の原則、輸送の高度化などにより、地場産業の減少、あるいは工業団地

NO. 産業 分類	1 盆裁	2 リネン	3 林業	4 セー	5 陶器	6 陶器	7 陶器	8 陶器	9 陶器	10 石材	11 銅器	12 鉄器
製品をそのまま使用	○			○	○	○	○	○	○	○		
加工・修繕と活かす			○		○					○	○	○
原料・材料とそのまま	○	○	○									
使用 内容	造路 壁障	造路 緑化	木地 舗装	いす コラ ン	陶器 土 器	陶器 土 器	陶器 土 器	陶器 土 器	陶器 土 器	石材 造路 壁障	銅器 造路 壁障	鉄器 造路 壁障
産業分類	— 農林業 — * 鉱工業 (規模あり) — * 現況あり											

図2 地場産業と使用形態の特徴

1 盆裁	2 リネン	3 林業	4 セー	5 陶器	6 陶器	7 陶器	8 陶器	9 陶器	10 石材	11 銅器	12 鉄器	NO. 産業 分類	期待される効果	地場産業の活用	市街地の活性化	商店街の活性化	住民の生活の向上
		○	○	○								消費	増加	○	○		
○	○	○		○					○			PR	の効果	○	○		
○												意識	の向上	○	○		
○	○			○						○		観光振興			○		
○		○	○	○					○			街づくりの核として			○		
○		○	○	○						○		生活環境の向上					○
○		○	○						○	○		イメージ向上			○		○
		○										商業振興				○	

図3 地場産品を活用して期待される効果

図4 地場産品を活用する利点と受益者の関係

化、そして地元での産業自体の評価の低下などが現実の問題となるに至った。その中で、街の個性創造に際し、地場産品を積極的に活用している事例に関して分析した。

図2から、産業とその利用形態につながりがあると考えられる。農林業は原料、材料をそのまま都市空間に利用されている。鉱工業においては、その製品において規格が決まっているものと、そうでないものに分けられる。規格をもつ鉱工業は製品自体に個性をもたせることが困難であるため、製品を集合体として大きな構造物において個性を求めるのである。しかし規格をもたない鉱工業においては、製品製作の過程の加工技術を生かして、いろいろな形に姿を変えて都市空間の中に利用されている。また、これは個々として個性が、加工のアイデアに支配されると考えられる。

また図3から、行政側が地場産品を活用することによって期待される波及効果による利点を明らかにすることができた。地場産業の振興として、消費の増加、PRの効果、産業従事者の意識の活性化などがあり、さらに観光の振興、街づくりの核として全域への拡がりを期待して、あるいはモデル事業としての存在、また生活環境の向上、街のイメージ向上やシンボルづくり、商業振興などである。

—— 藤岡市を事例として ——

藤岡市は、群馬県の南端、東京から約95 kmに位置し、関越自動車道の新潟線(工事中)と上越線(計画線)の分岐点にあたる。

瓦産業を地場産業として有し、歴史の中で形成してきた街並が、時代の流れの中でその瓦屋根の美を失いつつある現状で、地場産品を活用する利点が実際に有効であるかを図4で確認した。

よって、街の活性化と景観整備が、地場産品を使用することと連結びつくことが確認できた。

また住民へのアンケート結果の質問欄のクロス集計から、瓦の街づくりへの消極的態度の原因が瓦産業への意識の低下があることなどが明らかになり、それらをまとめる図5が得られた。

また、瓦屋根の体験として俯瞰景観が74%を占め、平面的行動圏での意識が5%と低いことも明らかになった。

—— 結論 ——

以上のことから藤岡市は平面的行動圏での瓦屋根の印象的体験(図6)の整備が住民参加の街づくりへの第一歩であると考えられる。また、地場産品を活用する利点は、図4から明らかになった。

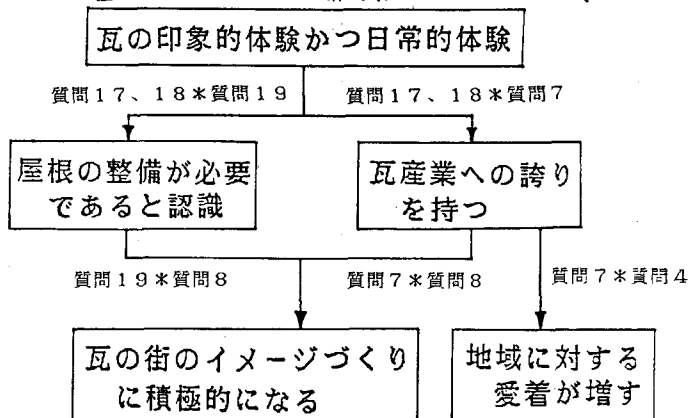


図5 瓦の街づくりに住民参加を促める流れ

	内容	平面図	パース	現状	対策
近距離風景	DETAILにおいて瓦の印象的体験			看板によって隠される	看板の撤去
遠距離風景 (ひきがあることによる)	T字路 紋じ込みにより、より印象的			看板によって隠される陸屋根である	看板の撤去 家の建て替え
	OPEN SPACE 借景的広がり的美			駐車場の整備の必要	周辺整備 借景

図6 街のデザインの方策